
 紹 介

A. V. Beliakov, *Chingisidy v Rossii XV-XVII vekov: prosopograficheskoe issledovanie*

(『15—17世紀ロシアのチングス裔——プロソポグラフィック的研究』)

濱 本 真 実

ジョチ・ウルスとその後継諸国の人びとの多くは、亡命や戦争捕虜、或いはロシアによる土地の併合など、さまざまな形でロシアの君主の臣民となった。これらの人びとの存在は、「ユーラシア主義」と呼ばれる、ロシアの東洋的な要素を重視する見方において、また、ロシアを多民族帝国として考える際にも、大きな意味を持つ。なかでもロシアのチングス裔は、イヴァン4世（在位1533—84）に代わって全ロシアの大公として即位したチングス裔、シメンオン・ベクブラトヴィチをめぐる問題を中心に、ロシアではもちろん、日本や米国でも、現在に至るまで関連分野の研究者の興味をかきたてている研究テーマである⁽¹⁾。

ロシアのチングス裔についての研究は、19世紀後半のヴェリヤミノフ=ゼルノフによる著作⁽²⁾が、未完ではあるが網羅的かつ信頼のおけるものであり、現在でもその価値は失われていない。ここで取り上げるベリャコフの単著は、チ

(1) 最近の出版物としては、たとえばロシアでは B. R. Rakhimzianov, *Kasimovskoe khanstvo (1445-1552 gg.). Ocherki istorii*. Kazan', 2009. 日本では赤坂恒明「ジュチ・ウルス史研究の展望と課題より」吉田順一監修、早稲田大学モンゴル研究所編『モンゴル史研究——現状と展望』明石書店、2011年。米国では *Russian History* 誌(vol. 39, no. 3, 2012)におけるイヴァン4世とシメンオン・ベクブラトヴィチに関する特集など。

(2) V. V. Vel'iaminov-Zernov, *Issledovanie o Kasimovskikh tsariakh i tsarevichakh*, part I-IV, St. Petersburg, 1863-1887.

ンギス裔の集住地カシモフを中心に据えたヴェリヤミノフ＝ゼルノフとは異なり、「ロシアの君主に仕えるチンギス裔が、モスクワの支配エリートにいかにして統合されたのか」（4頁）という問題設定のもとに記された、500頁を超える労作である。

ヴェリヤミノフ＝ゼルノフの著作では、洋の東西を問わずに、チンギス裔に関する様々な史料が駆使されているが、ロシアの文書史料の利用が不十分だった。これに対してベリャコフは、特に17世紀の文書史料を豊富に用いることにより（16世紀までのロシアの文書史料の多くは火事により失われてしまっている）、ロシアのチンギス裔の姿を生き生きと描き出すことに成功している。評者は、著者ベリャコフと類似した関心をもって研究してきたが、チンギス裔の生活の諸側面が、これほど詳細に明らかになろうとは想像だにしていなかったというのが率直な感想であり、文書史料から抽出された膨大な情報に圧倒された。今後本書が、ロシアのチンギス裔を論じる上で、ヴェリヤミノフ＝ゼルノフの著作と同様、必須の研究となることは間違いない。

文書史料の情報のほか、本書の史料についてはもうひとつ特徴がある。本書の出版地であるロシアのリャザン州都リャザンは、著者の居住地でもあり、リャザン州には上述のカシモフが含まれる。著者はこのような地理的条件を活かし、カシモフやリャザンに残る文物や伝説などにも言及している。これらの情報により、チンギス裔たちの肖像がいつそう生彩に富むものとなっている。

16世紀以前に関しては、このテーマの史料は限られているため、研究者たちはときに、推測の上に推測を重ねて議論を展開してきた。しかし本書の著者は、「（チンギス裔の家来の民族構成を論ずる際には）ありとあらゆる憶測の、ぐらぐらした根拠の上に立ちがちだ。しかし、どのような立論も、いかにそれが美しくとも、真実であることを主張するためには、まずは事実に基づかねばならない」（251頁）という言葉に見られるように、極力史料に基づくことを心がけており、禁欲的ともいえる態度で慎重に考察を進めている。この姿勢こそが本書の最大の特徴といえよう。もし本書の読者が評者のように、「ユーラシア主義」等々の議論への発展を期待しつつ本書を読み進めるのであれば、読後に物足りないさを感じるかもしれない。本書の醍醐味は、大枠での抽象的な議論にではな

く、ロシアのチンギス裔の具体像を明らかにしているところにある。

以下、史料と先行研究について記した第1章を除く第2章以降に関して、章ごとに簡単に内容を紹介していく。

第2章「人生」では、チンギス裔たちの一生が、ロシアへの到来、正教への改宗、結婚、宮廷での諸儀式への参列、私生活、埋葬に分けて分析される。結婚を論ずる第3節では、正教に改宗したチンギス裔の男女が、16世紀初頭からモスクワ大公家と婚姻関係を結び、16世紀に大公の姻戚として大きな影響力を持つに至る過程が明らかにされている。この時期にチンギス裔の男性がモスクワ大公家以外の女性と結婚する場合には、基本的に古いモスクワ貴族の家系のうち、断絶しそうな、男の兄弟の無い女性が妻に選ばれた(111頁)。これは、結婚相手を選ぶロシアの君主が、チンギス裔の姻戚となるロシア貴族の台頭を警戒していたことを示している。それほどまでに、チンギス裔のロシア宮廷での地位は高かったのである。16世紀にチンギス裔がモスクワ大公家の親族として扱われていたことは、第6節における埋葬地の分析でも証明されている。私生活を扱う第5節は、チンギス裔の間での学問、信仰、調度品、飲食物等を、断片的な史料から可能な限り再構成する試みであり、読者にチンギス裔の生活を垣間見せてくれる。

第3章「ロシアのチンギス裔の家来たち(dvory)」では、チンギス裔の直接の支配下にあった人々について、アタリクやカラチ・ベグなど、ロシアに持ち込まれた草原の伝統を含め、その構成と法的地位が明確にされたのちに、時代による変化がたどられる。またこの章では、当初チンギス裔が、ロシア軍とは別の独立した軍隊を統率していたが、その独立性が時代とともに失われていくこと、また、タタール軍人の戦闘能力が低下し、17世紀後半には、タタール軍人がロシア軍に組み込まれていく様子が明らかにされている。

第4章「ロシアのチンギス裔の扶養」は、チンギス裔の収入を様々なカテゴリーに分けて論じている。筆頭は、これまでロシアと草原との関係を論ずる際に、必ずといっていいほど取り上げられてきた、ロシア側からチンギス裔への「貢納(vykhod)」である。カシモフのチンギス裔にモスクワの君主から与えられた「貢納」は、カシモフがカザン・ハン国やアストラハン・ハン国と同様

の「国家」であった証左とされることがある。しかし著者は、「貢納」という言葉はモンゴル帝国によるロシア支配時代の名残りであり、これは単にチンギス裔への支払いを意味していたにすぎない、という立場をとる（260頁）。この章ではまた、カシモフ君主の収入源の検討の結果として、カシモフの最後の統治者をアルスラン・ハン（在位1614—26）としている点（274頁）が注目される。カシモフに関して著者はまた、「ハン国」と呼べる領域はカシモフの統治者が個人的に有するわずかな土地に限られていたことを明らかにする。そして、17世紀のカシモフのこの状態は、それ以前の時代にも若干の修正の上であてはまる、としている（278頁）。しかしながら、本書全体で論じられているように、チンギス裔のロシアでの待遇が、時代により、特に17世紀に入ってから大きく変化していることを考えると、著者のこの部分に関する主張はやや説得力に欠ける。16世紀までのカシモフの状態に関しては議論の余地があろう。

第5章「15—17世紀のロシアのチンギス裔の地位と内部のヒエラルキー」では、15世紀にモスクワ大公よりも上位と見なされたチンギス裔の地位が、時代が下るごとに徐々に低下していく過程が描かれる。16世紀末から17世紀初頭にシビル・ハン国クチュム・ハンの子孫が大量にロシアの君主の臣下となったことが、チンギス裔全体の地位の低下を招いたという指摘（394頁）は興味深い。16世紀と比較すれば彼らの地位は低下したものの、17世紀後半にすべてが正教徒となったチンギス裔には、モスクワ宮廷で依然として高い地位が認められており、彼らは比較的貧しかったにも関わらず、ロシアのツァーリに連なる家系やその他の有力貴族の結婚相手として人気を博した（413—414頁）。その後、1718年に「皇子」tsarevichの称号が「公」kniaz'に変更されたことをもって、チンギス裔のロシアへの同化過程が終了したと著者は見なす（414頁）。

全体として、非常に注意深く記された研究書であり、その記述は信頼できるが、惜しむらくは誤植が少なからず散見される。17世紀と記されるべきところに16世紀と記されていたり、また、系図が本文の記述と齟齬していたりする。内容の質が高いだけに、本書の完成度を下げるこれらの誤りがたいへん残念に思えた。

文書からの情報に溢れた本書ではあるが、たとえば著者は、一般に上述のア

ルスラン・ハンの次のカシモフ君主と言われるサイイド・ブルハンに、ロシア語とタタール語の教師をつけたと記す文書⁽³⁾の存在を知らないと思われ(129頁)、当然のことながら、著者が、関連する文書を漏れなく読破したわけではないことが分かる。今後もロシアのチンギス裔に関する新たな情報を、著者の利用していない文書から抽出することは可能だろう。しかし、著者自身も記しているように(417頁)、本書で描かれたチンギス裔の姿が今後の研究によって大きく変化することはないと考えられる。

ただし、すでに触れた、16世紀以前のカシモフに関する著者の考察や、「モスクワ国家のチンギス裔は大部分が不要な人びとにとどまった」(416頁)という印象は、著者が17世紀の史料を中心に扱っているために、17世紀の状況をそれ以前にあてはめて考えていることから出てきているようにも思われる。15、16世紀に関しては、今後ベリャコフの推測が覆される可能性が十分にある。

著者は本文の最後に「本書に記された情報が今後、15—17世紀モスクワ国家のムスリム・エリートおよびタタール軍人全般について、実りある研究を促すことを確信している」(417頁)と記す。この言葉のとおり、これから本書をもとに、関連する研究がさまざまに展開していくと考えられる。今後残された課題のうち、評者が気づいた点を2点挙げて、本紹介を終えることにしたい。

まずは、チンギス裔とモスクワ大公家の血縁関係についてである。本書でたどられるチンギス裔とモスクワ大公家との度重なる婚姻関係からは、チンギス裔がモスクワ大公家にとりこまれていく様子が明らかになっている。一部のテュルク系民族がロシアのツァーリを「チンギスの直接の子孫」(4頁)と考えたのは、故無きことではない。また逆に、チンギス裔はモスクワ大公家の成員でもあることになる。著者は、シメオン・ベクブラトヴィチの大公位即位の一因として、彼がイヴァン4世の甥にあたる人物だったことを指摘しているが(389頁)、この事件以外に関しても、ロシアと草原との関係、また、ロシア国内の政治におけるチンギス裔の活動を、モスクワ大公家構成員としての側面に注目しつつ、再検討する必要があるように思われる。

(3) ロシア国立古文書館(RGADA) F. 131, Op. 1, D. 1634/4, L. 2.

第2に、本書であきらかにされたチングス裔の地位の変化を、ムスリム・エリート全体の、さらにはロシア史の文脈のなかに位置づける必要性である。たとえば、アレクセイ帝治世（在位1645—76）におけるチングス裔の地位の変化に関して、本書では、アレクセイ帝と総主教ニコンのおそらくは共同のイニシアチブにより、1653年、ロシアの全てのチングス裔と、タタール貴族に、正教改宗を促す決定がなされたこと（87, 411頁）、またこの時期には、改宗したチングス裔による、宮廷の諸儀式への参加の伝統が復活させられたこと（124, 411頁）が述べられている。しかし、その背景については、正教の唯一の皇帝としての、アレクセイ帝の自負と全能感や、彼の復古主義といった、簡単な説明がなされているにすぎない（410—11頁）。アレクセイ帝の時代は、ロシア史においてさまざまな意味で重要な転換期であり、この背景のさらなる考察は、ロシアと東方との関係の変化をより深く理解することにつながるはずである。

最後に、本書の巻末には、名前が明らかになっているロシアのチングス裔189名（女性の場合には父の名のみ掲載の場合あり）の、家系ごとに分けられた一覧、および、その親族・取り巻きの一覧が付録として掲載されていることを付記しておく。この付録も、今後の研究の発展のための、大いなる助けとなるであろう。

А. В. Беляков, Чингисиды в России XV-XVII веков: просопографическое исследование (А. В. ベリャコフ『15—17世紀ロシアのチングス裔——プロソポグラフィック的研究』). Рязань: Рязань. Мир, 2011, 512с.